たたみにひとつ
べに、ひとつ
忘れたのか、残したか
窓に落ちた
　ぎんぎらに
まっ赤に染まった
　目の涙
すさんだ心で唄うじゃないが
ロック、ロックでまっかっかっ
ロック、ロックで日がしずむ

まっかっかロック

林 静一

とに
すさん
うたう
な
ろっく、
っかっか
く、ろっ

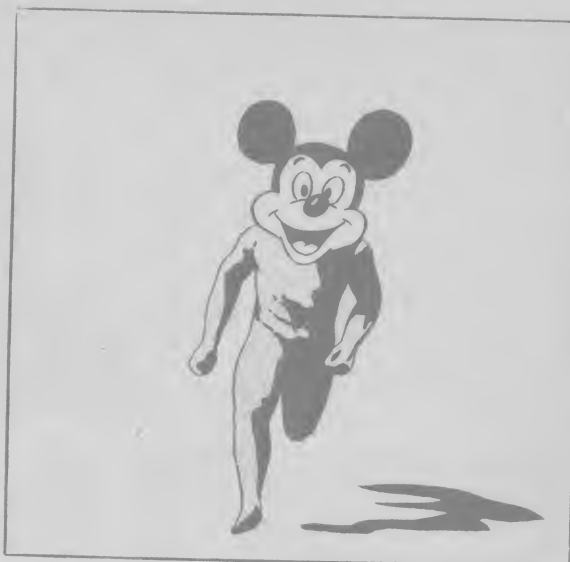
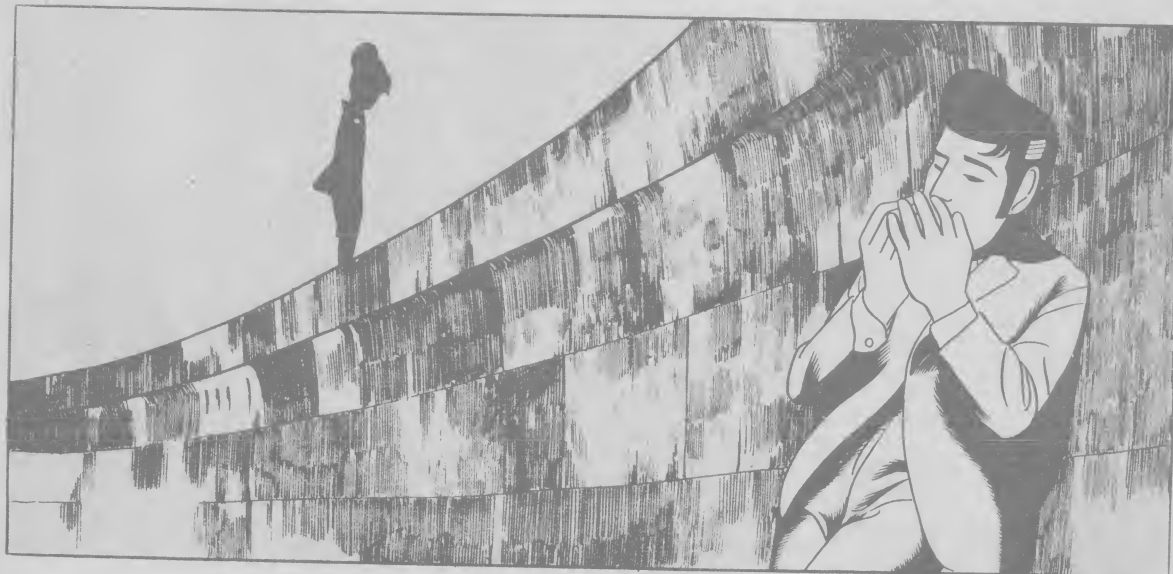
ねえ～あたいに歌っておくれ

心はすぐかわる

だけど……

あなた
あな
ああ
すべてが
あなた あな

淋しかったから
くちずけしたの

いきて　ゆく　わたしだけ
しんでゆくのも　わたしだけ
いつか　いちどを
まちましょう

花のホールで踊っちゃいても
春を持たないエトランゼ
男同士の
相合傘で
あ〜あ、あらし呼ぶよな
夜が更ける

逢いたかった
もう
何年に
なるんだろう

おぼえているかい

ロックロック
唄ってた頃を

ピーーン

ほら
私の作ったあの曲
君がその…
オウオウいや
イエイエだ

それが
セクシィだって……
ハハハハ
あの娘が
いってたっけ……

君がいない
三十六号室は
さみしい
ふるさとにもいったよ
ハマナスが咲いて
いた……

キュ――ン

二人の
コーヒーと
トーストさえ
凝視した
その朝

君は
何を見たの
あの窓から
見える
坂の上に……

あ〜あ
君が
この様にするなんて
何年ぶりだろう
うれしくて……

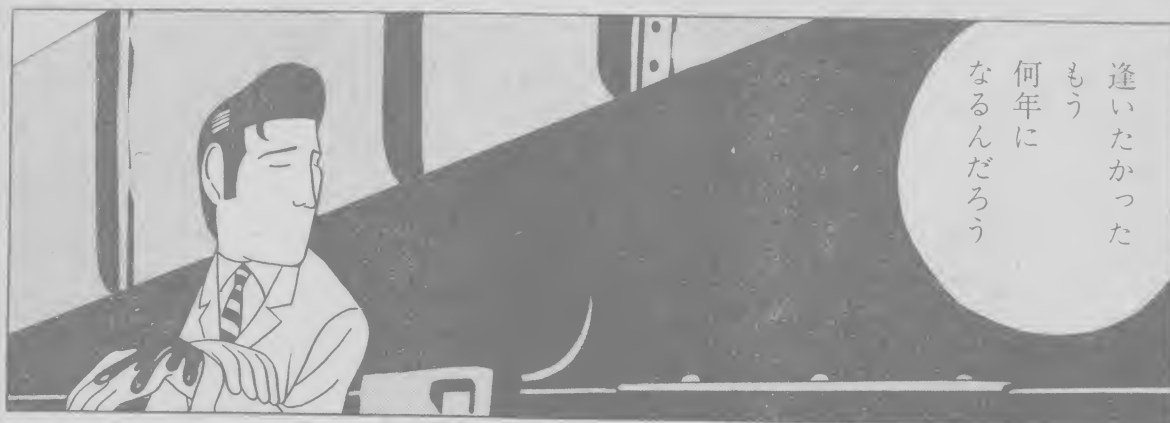
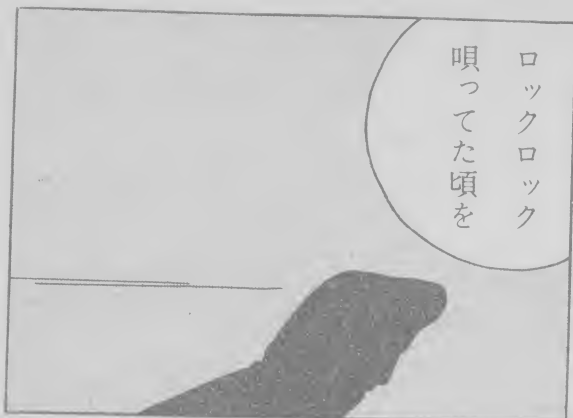
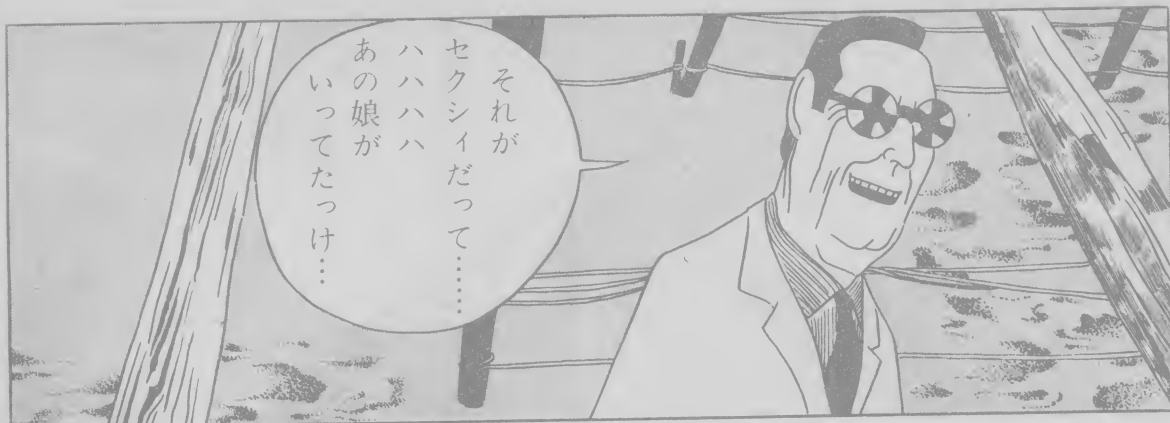
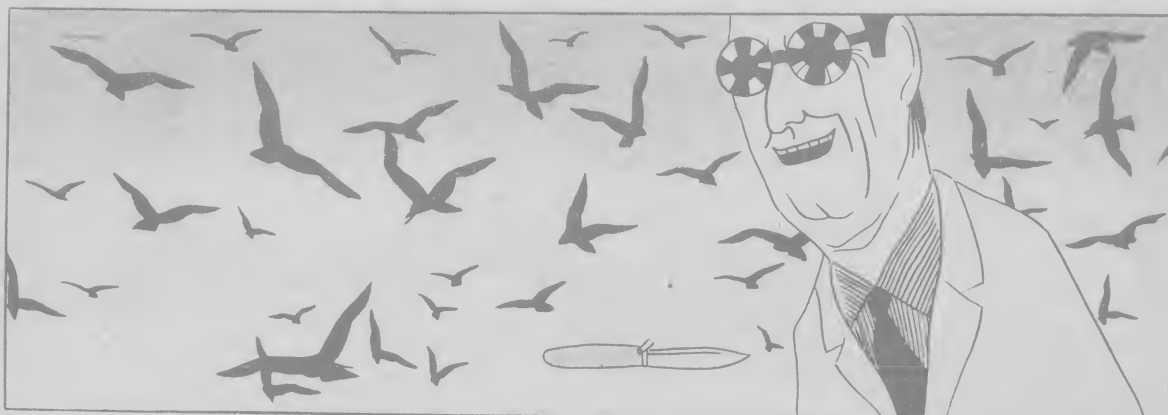
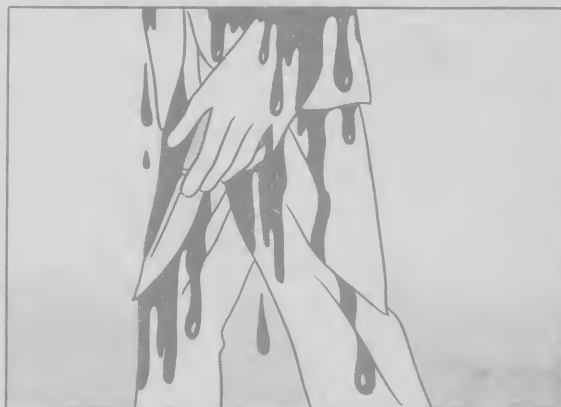
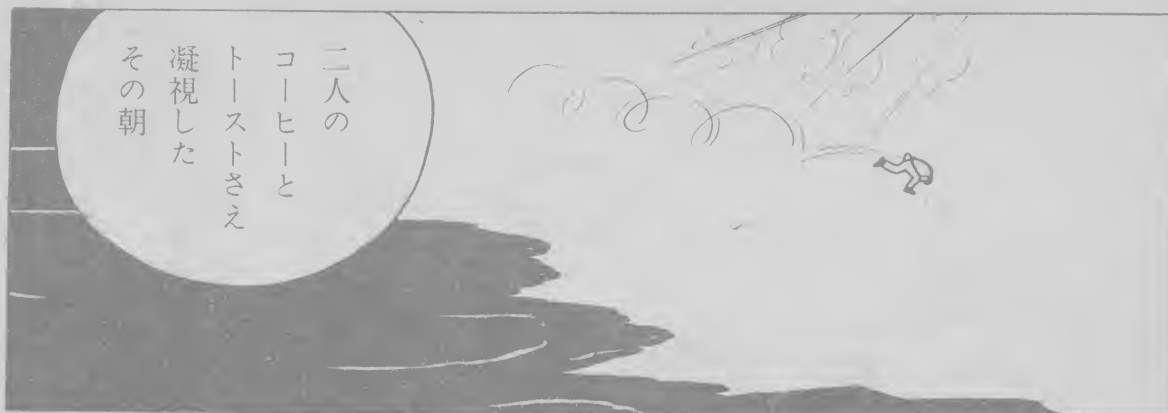
くっくっ
くっくっ

あの日から
私は
私でないの

ららん　ら　らんら
らんけな——
うえい

もえる〜
せい
かし〜ら〜

すべては
落日の中に
ぬりこめられ
それ自体
幸せ色の
光りをはなつ
終

読者サロン

よどんだ沼に生きる

渡辺明子（東京・20歳）

私がつげ義春の作品を意識しはじめて以来、彼の作品を読みながらある種の霊感を感じるのだ。いわゆる「ゾクゾクっとする」というやつだ。それは、『ガロ』の他の作品群が、極端に情況というものを敏感に反映して、毒々しいまでの鮮やかな魅力を持っているのに対し、氏の作品の主人公によくみられる「淡々と生きる」ことに何か魅かれるものがあるからかも知れない。ともすれば、頽廃のため息でかき消されてしまいかねないひとことまひとことまに人間である証拠の血をにじませながら生きる人々。その燃える情炎を感じながらも、それでもなおけだるい夏の午後のようなアンニュイは、生きることをも否定しているかのようだ。

しかし、つげ義春の作品中には、醜いことも、悪いことも、すべてひっくるめた意味での人間が生きている。およそ、私達の体験を超越しているかのようにみえるが、それはいかにも、日本人の息を感じさせる土着性の上になりたっている。「チーコ」「運命」「古本と少女」などに示された人間の出あう偶然、運命の流れという暗黙の定めに、O・ヘンリーの短篇を思い起こす。

作品の主人公は皆んな孤独なのに、誰も涙いってきこぼさない。行きずりの人間同志の素朴な情感を描き続けるうち、この広大な地上にかくも多くの孤独が漂泊しているということなのか？ それとも孤独などというものは、理想を追い求めながらも、かくもプラクチカルでみじめにしか生きることのできない私達の幻想でしかないのか？ そうした混沌の中で、文明を正当化してひとつのパターンをつくりあげ、抒情をその中に押しこめてしまう私達の前で、作品の主人公達は時をへだてたカビ臭い人間でしかない。

が、それは、リアリズムに徹して生きる私達がすでに入っていけない、一種のワンダーランドに彼らが存在しているからか？ それでもなお、私達は彼らを「抒情」という、単純でプリミティブな次元にまでひきずりおろし、必死の挑戦を試みるのである。よどんだ沼に生きることを余儀なくされた魚は、自らの創りあげた理論に従って生きるしかないのだ。

カット・佐々木マキ

つげ、滝田　バンザイ

橋本知代三（神戸）

小生、つげ義春のファンなり。この度、彼の作品集が出されるとのこと、嬉しい次第なり。しかしながら、最近、彼の作品が「ガロ」の誌上に見られなく、なんとも寂しいことである。

とにかく、彼に一言。年に一作でもいい、本当にいい作品を画いて下さい。粗製濫造などはもってのほか、読者は早く、早く、おめにかかりたいのをガマンしいしい、その一作を待っています。

このあいだの「滝田ゆう特集号」面白く拝見させていただきました。未発表の書き下しものに面白くないものがあったのは、どういうわけでしょうか。

それはともかく、今、連載中の「寺島町奇譚」毎回楽しみにしています。滝田氏の「しずく」「ラララの恋人」等は、つげ氏の「紅い花」「ゲンセンカン主人」「もっきり屋の少女」等に負けないものと思います。いずれ滝田氏の作品集も発刊されるのではと期待しているのですが、いかがでしょうか。

先ほどから一人で酒を飲んでいたところです。つげ義春バンザイ、水木しげるバンザイ、滝田ゆうバンザイ、青林堂バンザイ。

〝ターマ、タマタマタマ〟

遠藤賢司（東京）

滝田ゆう様　あなたの描く猫がとても好きでたまらない。

あなたの描く猫は本物ですね。これは本当に猫が好きじゃないと書けない何年間も猫と暮した人じゃなくちゃ書けないもの。あなたの猫〝タマ〟の顔をみているだけで、いいなぁ　いいなぁと思います。僕も猫が好き。僕の猫もあなたのと同じ名、三毛猫の〝タマ〟

十二年間も家族の一員として生活してたが、私生児の〝コロ〟を産んで、家族の愛情がその〝コロ〟に移るに従って、怒り、嫉妬に狂い、ついにどっかへ行っちゃったのです。まるで人間みたいです。今後悔してます。あの時なぐらすに済まし、弁当を毎日残してあげればよかったなと、ほんとに好きだったのです。ジーンと何かを〝タマ〟は僕に残して行ったのです。だからとっても悲しくなるのです。

あなたの〝タマ〟も同じでしょう。土足で縁側から畳に入ってしかられて、毛むくじゃらの足に笑いながら寄りそっては蹴られた〝タマ〟は、頭に来て障子を破り、キヨシ君すなわちあなたの「ターマ、タマタマタマ、ターマ、タマタマタマ」と呼ぶ声にも一瞥すると、どぶに入り、小さな足跡をつけるのです。その通りなんですよね。猫っていうのは。そしてこの時のあなたが僕で、あなたの〝タマ〟が僕の〝タマ〟なのですよね。昔こんな臭いをたくさん嗅いだはずなのです。

どぶの臭いのようなそんなものです。絶対あったはずです。あなたは絵の中でじっと何かをみてるのです。皮膚で感じるあなたの克明な線。大中小の雑音。見えない雑音。でもあなたにとっては、雑音じゃないのです。勿論僕にとっても、言葉は少ないけど、解かるんです。感じで、ほんとに臭ってくるんです。ほんとはこんな文なんか書きたくない

し、何を書いていいかはっきりしないのです。ただ感じるものは感じるし、いいものはいいのです。あなたの嫌いな?○○○の匂いとベーゴマやパアの音と〝濹東綺譚〟の四畳半の臭いが、皮膚と皮膚の匂いがしてならないのです。そしてなによりも、尾の先っちょが黒く、右耳の辺りが黒い、〝タマ〟が好きです。笑ったり、あくびをしたり、じっとみつめたり、眠ったりするあなたの描く本物の猫が、たまらなく好きです。

独善的エゴイズムの提起

菅野茂（神奈川・20歳）

「ガロ」に掲載される作品及び作家についての私見と問題提起。とくに、インテリ（知性の働きでもって物事を理解してしまう）タイプの作家のもつ特徴と作品について

彼には、何よりもまず最初に、知性の働きで理解して得た主題がある。彼は、どうしたらその主題を最も良く表現した作品ができるか、ということに神経を集中している。最良の表現方法を求めるあまりに、ストーリーの展開、構成、構図、カット、コマの使い方など技巧に関することが、彼の頭の中を占拠してしまっている（とぼくには思える）。そして、当然の帰結として生み出されるものは、目的意識性に貫かれ、手段化されてしまった作品。それと裏腹なものとしてある啓蒙（主義）的な発想法。

ぼくは、インテリ作家に対して否定的です。彼の作為と意識性が見えすいています。知性の働きで得たものは、なんにもならないと思います。それは、知性ある人は、言葉で論理を展開する（される）と、それが成り立つ度合が自分の中にないのに、理解してしまうという情況があるからです。

「読者サロン」に登場する人たちの発言についても、言

ぼくは、言葉を論理的に振り回す人に対して否定的です。現在、言葉はその内実を失っています。言葉は単なる記号でしかないのです。言葉で論理を謳歌することは無意味です。しかし、その無意味なものが意味を有することができる情況が存在しているのが現代です。

もっともらしく論理だてて言葉（絵）を羅列した発言（漫画）はいやらしい。しかし、それよりも問題となるのは、その発言（漫画）をもっともらしく読んで、その人の頭の中でその人なりにそれを消化してしまう情況です。ぼくはこの二つのもっともらしさ（発言者＝漫画家のそれと読者のそれ）にこだわりたい。この二つのそれが両立したとき、コミュニケーションが生じるだが、それは、幻影（暗黙のうちに了解されている土台の上に成りたった虚像）でしかないのです。

ぼくは、言葉によるコミュニケーションについて否定的です。現在、ぼく（たち）は、コミュニケートすべきための「言葉」をもっているのか、という問いに答えられないのです。

林静一、佐々木マキ氏が試みている（とぼくには思われる）《発言者（作者）の非もっともらしさ、読者の非もっともらしさ、この二つが両立したとき生じるものの可能性》は何か。

「カムイ伝」について

大木独活（福岡・18歳）

「カムイ伝」は、三部作で、現在は、一部を連載しているそうである。私は、数年前、テレビで、青林堂の社長さんが、言われたように記憶しているのであるが、「カムイ伝」は、後に、昭和まで続く物語だとかいうことです。

白土氏は、「影丸伝」の後記に「残念なのは、この時代がどのようなもので、いかに人びとは戦い、どのようにこの時代をおし進めてきたかをかき表わせなかったことである」と、書いておられた。氏は、また「カムイ伝」の始まる前に、『ガロ』誌上で「影丸伝が終わって、すぐにでも次の長編にとりかかりたかった。だが、おもわぬ時がすぎてしまった。あれやこれやと本などを読み完全武装をこころみたがやめることにした。馬鹿は馬鹿なりにそこから出発すべきだということに気がついたからだ」とも、書いておられた。「カムイ伝」の構想は、「影丸伝」をかく前からあったそうだが、「影丸伝」からおよそ二年間を経て始まった。

昨年の度重なる休載の後、「カムイ伝」には、制作スタッフとして、小山春夫氏と白土氏の弟、岡本鉄二氏の名前がのせられるようになった。また、私の知る限りでは、氏は現在、「カムイ伝」の他には、何も執筆しておられない。これらの事から思われることは、氏は、今、「カムイ伝」のみに全力を投入されているのではなかろうか、ということである。氏自身もういやになっているのではないだろうか等の意見は、私にとって、非常に気に入らない。まだ「カムイ伝」のゴールは、見えてないはずのものなのだから。

次に少々不満に思うことは、昨年の十一月号に掲載された、池上遼一氏の作品、「すばらしき時代」のことである。この作品は、すでに、単行本として私達の目にはいっていたのである。それが五年も十年も前の作品ならばいいかもしれないが、この場合、発行されて日も浅いことだし、『ガロ』にとりあげる価値は、多分に失われているものと見てもよかったであろう。

マンガに関する参考文献案内

●**歌謡曲の無名の気分―林静一「花の詩」にふれて**　深山美里『眼光戦線』No.5

●**マンガに真実をもとめて　永島慎二**　石子順『わかもの』4月号

●**グループパワー　漫画家集団「ガロ」**　寺山修司『週刊朝日』4月18日号

●**ノンセクト・ラジカル・マンガ論**　安岡明夫『週刊読書人』4月21日号

●**幻惑の土地の向うに―滝田ゆう「寺島町奇譚」論**　金井美恵子『新潮』5月号

●**漫画賞と批評の貧困**　石子順造『週刊読書人』4月28日号

●**わが道をゆく青林堂**　「ほるぷ新聞」4月5日号

●**いま大学生が読んでいる本「ガロ」と「COM」**　岩崎呉夫「ほるぷ」3月号